

【自著紹介】 小山鉄郎『村上春樹の動物誌』



(早稲田新書、早稲田大学出版部、2020年12月)

村上春樹は動物好きの作家です。そのことは作品の名前にもよく表れています。例えば長編の『羊をめぐる冒険』『ねじまき鳥クロニクル』『海辺のカフカ』など。ちなみに「カフカ」はチェコ語で「カラス」のことです。さらに「カンガルー通信」「螢」「象の消滅」「かえるくん、東京を救う」「品川猿」……などの多くの短編があります。その動物たちは何を象徴しているのか。本書は作品に出てくる個々の動物の側から、村上春樹文学の姿を探ったものです。

私は村上春樹作品の中に貫かれる「歴史意識」に注目して読んできましたが、それを代表する動物が「羊」です。十二支にもある「羊」は、日本人にとって古くからなじみ深い動物の印象がありますが、でも明治頃までは、ほとんどの日本人が見たことのない動物でした。

『羊をめぐる冒険』では、日露戦争が迫りつつある時代、来るべき大陸進出に備えて防寒用羊毛の自給を目指す軍部が「羊」を輸入して、羊牧場を作っていく姿が描かれています。同書によると、その後、第2次世界大戦で敗戦するまで羊は増産され続けて、敗戦まもない1947年には北海道で27万頭にまでなっていました。しかし、この長編の時代設定である1978年には5千頭にまで減ってしまいます。戦後に羊肉羊毛が輸入自由化され、それらがオーストラリア、ニュージーランドから輸入されたこともありました。

このように幕末まで日本になく、明治期から国家レベルで輸入、育成され、敗戦後、見捨てられた動物が「羊」です。「まあいわば、日本の近代そのものだよ」と同作にあります。『羊をめぐる冒険』の題にこめられた意味は「日本近代をめぐる冒険」ということなのでしょう。

村上春樹が自らの家のルーツと父親の日中戦争従軍体験を書いた『猫を棄てる一父親について語る時』が大きな話題となりましたが、この題名にもある「猫」も村上作品にとってたいへん重要な動物です。

その「猫」たちにはなぜか魚系の名前が多いのです。例えば『羊をめぐる冒険』では「いわし」、『ねじまき鳥クロニクル』では「サワラ」、『海辺のカフカ』では「トロ」です。

『羊をめぐる冒険』に登場するのは「尻尾の先が六十度の角度に曲がり、歯は黄色く、右眼は三年前に怪我したまま膿がとまらず、ほとんど視力を失いかけていた」というよぼよぼの〈無名の猫〉ですが、それが「いわし」と命名されると、「まるまると太っちゃい」ます。

そして『ねじまき鳥クロニクル』では「猫」が「ワタヤ・ノボル」から「サワラ」と改名されることが、失踪している妻クミコの帰還の予兆となっています。「サワラ」は漢字で記せば「魚」

と「春」を合わせた「鱒」で、瀬戸内の春告げ魚です。太古、魚は生命のシンボルでした。このような村上作品の「猫」への魚系の命名には「再生」のイメージが託されています。

作家になる前に村上春樹が「ピーター・キャット」というジャズ喫茶の店主だったことは有名ですが、この店名がなぜ「ピーター・キャット」なのかという問題も考えてみました。

『猫に名前をつけるのはむずかしいことです』というT・S・エリオットの有名な詩があるけど、知ってますか？。『サラダ好きのライオン—村上ラヂオ3』に、そのような言葉で始まるエッセイがあります。村上春樹はこのエリオットの言葉を幾つかのエッセイの中で繰り返し紹介しています。

同詩はミュージカル『キャッツ』の原作となったものですが、その中でエリオットは「猫は三つの名前を持たなくてはならない」と主張しています。三つの名の最初は「普段呼ばれる簡単な名前」で『『たま』とかね』と村上春樹は書いています。そしてエリオットの詩を読むと「普段呼ばれる簡単な名前」の「猫」の名前の候補として「ピーター、オーガスタス、アロンゾ……」などが挙げてあるのです。つまり、村上春樹が『『たま』とかね』と言った部分に相当するエリオットが挙げる猫名の最初が「ピーター」なのです。

村上春樹の愛猫「ピーター」から名づけられた喫茶店名のようですが、T・S・エリオットの詩と村上作品との関係をもう少し考えてもいいのではないかと考えています。

そしてT・S・エリオットの「うつろな人間たち」の詩のことも村上作品に繰り返し登場しています。『海辺のカフカ』には、うんざりさせられる人たちは「想像力を欠いた人々だ。T・S・エリオットの言う〈うつろな人間たち〉だ。その想像力の欠如した部分を、うつろな部分を、無感覚な藁くずで埋めて塞いでいるくせに、自分ではそのことに気づかないで表を歩きまわっている人間だ」という、村上春樹にしては、少し激しい言葉が記されています。『騎士団長殺し』の免色渉も自分のことを「からっぽの人間です。無です。T・S・エリオットが言うところの藁わらの人間です」と語っているのです。

村上春樹のデビュー作『風の歌を聴け』の「僕」の分身的友人は「鼠」でした。「ピーター・キャット」という「猫」の名前をつけた喫茶店の店主が群像新人文学賞に応募してきた作品の主人公「僕」の友人が「鼠」なのです。このようなデビュー以来の村上春樹のユーモア精神を私は深く愛しています。

初期三部作に登場する「鼠」がつきあっていて、うまく関係が進んでいかない女が暮らしているアパートは「漁師」たちの小屋をつぶした場所に建っています。『ノルウェイの森』にも『1Q84』にも「漁師」が重要な役割を担って登場してくるのですが、この「漁師」と、T・S・エリオットの詩との関連も本書の中で考えてみました。

『風の歌を聴け』に最初に登場する動物は「象」ですが、その「象」は言語を象徴する動物だと思います。その他にも、移動を象徴する「虎」などについて考察しています。

【小山鉄郎（共同通信社編集委員・論集委員）】